

大学院ニュースレター

久留米大学大学院医学研究科

第99号／2021年6月28日発行

編集／ 医学研究科長

『「研究」との出会い』

久留米大学 学長 内村 直尚

「出会い」とは人の運命をも変えるものです。同僚、先輩、後輩に出会い、どのような患者さんに出会い、どのような書物と出会うのか本人も予測は不可能です。特に久留米大学医学部では「研究」との出会いを若い先生方に経験してもらいたいと願っています。食わず嫌いで避けて通ってしまうのではなく、一度体験してみて相性がよければ、しばらく続けてみることもできますし、その積み重ねが新たな展開を生み喜びや生きがいを感じ、次の目標が見えてくることがあります。実際、研究に全く興味がなかった人が研究の喜びに目覚め、優れた研究者になったという例もあります。もしかしたら将来、ノーベル医学賞をねらえるような独創的な研究が生まれてくるかもしれません。自分のテーマに向かって没頭し、先輩や同僚たちと共にディスカッションしながら一歩ずつ進んでいくプロセスが、さらに個々の成長を促すものだと思います。苦勞し論文を書きあげ学位を取得した時の達成感は一生涯の思い出になり、自信にもなります。

私は昭和 57 年に久留米大学医学部精神神経科に入局した直後、当時の稲永教授より統合失調症のドーパミン (DA) 過剰仮説をモルモットの側坐核ニューロンで検証するように言われ、1 年半の精神科の研修を終えた後に当時の第一生理学教室の大学院に行きました。数十ミクロンの単一細胞に数ミクロンの微小電極を挿入して電気変化を観察することによってドーパミンの作用を解明する研究ですが、不器用さでは誰にも負けないという変な自信がある私にとっては全く似つかわしくないものでした。大学院の先輩である麻酔科出身の先生は朝から夜遅くまで机の前から動かず英文論文と向かい合い、またアメリカ留学から帰国したばかりの吉村講師（現九州大学名誉教授）は毎朝「ノーベル賞は取れそうかな」と真面目な笑顔で語りかけるのです。西教授（現久留米大学名誉教授）からは「大学院を卒業するまではあなたの学位テーマに関する事以外の情報や知識は全く必要ありません。新聞やテレビを見る暇があ

るなら論文を読みなさい。眠っている以外の全精力は研究のみに傾けなさい。」と何度も諭されたものでした。また、「数個のニューロンで同じ結果が得られても信用できません。少なくとも百ニューロン以上で同じ結果が出なければ新しい事は言えません。」と、私にとっては増々気の遠くなるような言葉が笑顔とともに当然の様に口から発せられます。私は場違いな場所に迷い込んだものだと悩み、不安というよりむしろ恐怖感さえ感じるようになり、毎日眠っている時だけが安らぎを感じる唯一の時間でした。また、その当時助教授であられた東先生（現久留米大学名誉教授）のパワーはすさまじく、自ら陣頭指揮をとられ翌朝まで実験されることもしばしばでした。そのため東先生より早く帰るわけにはいかず、徐々にそのペースに慣らされていきました。約 1 年間は全く何の結果も得ることができませんでした。当時の西教授、東助教授をはじめ先輩たちの多くのアドバイスを受け試行錯誤しながら、やっとかすかな光が見えた時の喜びは今も忘れません。その後、世界で初めて中枢において電気生理学的に D₁ および D₂ 受容体を発見し、その結果をまとめ、学位論文を取得した時の達成感は言葉では表せない程でした。この大学院時代に研究に対する姿勢や厳しさを学ぶことができました。また、この時の苦しみを考えれば大抵の事には耐えられるという変な自信も持てるようになりました。

大学院を卒業し、アメリカへ留学し、電気生理学的セロトニン (5HT₂) 受容体の発見につながりました。その当時は目の前の研究に没頭していただけでしたが、近年使用されている非定型抗精神病薬は D₂ および 5HT₂ 受容体阻害薬であり、私にとっては苦勞して育て上げた自分の子供の様な愛着を感じます。基礎の研究であっても、将来、臨床に反映される可能性があることを自分の体験を通して実感することができました。今、振り返ると異国の地で、徐々に大学院入学時に西先生の言われた言葉の意味が私なりに理解できるようになりました。西先生の言葉

を解釈し、研究に対する心構え、取り組み方の基本姿勢としていつも心に留めています。

このように私の人生に様々な影響を与えてくださった恩師や同志と呼べる多くの先生方と出会うことができ、その結果、思いもよらない研究生活を送る

ことができ、そのことが現在のモチベーションにもつながっています。私は若い先生方に「研究」との出会いを是非とも体験してもらいたいと願っております。そして、その体験はきっと臨床やこれからの人生にも生かすことができると確信しています。

『肝内腫瘍性病変の画像・病理診断のおもしろさに惹かれ』

臨床検査部 教授 中島 収

病理診断は最終診断であり病理医は臨床医から頼りにされる機会も多く責任の重い職種とされる。多くの臨床医や一般の人の中には病理検体（病理標本）をみれば、そこに答えがあるのだから、その診断結果を報告してくれれば済むと、簡単に考えている人が多いのではないだろうか。もちろん標準的な病理医の誰が見ても同じ診断名になる様な典型像がみられれば比較的簡単である。しかし、採取された臓器や組織、細胞があまり見ることがない場合や特殊な症例は、日頃から所属病院で出される検体とは異なり診断が困難になることは当然である。すなわち、日頃からみられた検体は経験頻度が高く、まれな疾患でなければその診断に迷うことは比較的少ない。また病理医の所属する施設の特殊性（集まりやすい疾患の検体）や各病理医の専門性により診断の精度や再現性が異なるのは周知の事実であることから、病理医間のコンサルテーションシステムが存在する。

病理医の診断能力に関しては日本病理学会の病理認定制度があり、受験資格があれば認定試験を受けその合格により病理専門医を取得することが可能で、これがまず病理診断医の基本的な水準であり基本資格となる。病理学の中には病理診断が主となる外科病理、動物や培養細胞などを使う実験を行いその結果から知見を得る実験病理、臨床検査学を含む臨床病理などが含まれる。基礎医学系であるが病理学の中にも臨床医学領域と同様に診療・研究・教育の分野が含まれ、対象となる材料の集まりやすい環境との関連性が深い。対象（材料）としての質や量が所属施設の病理学教室や関連する臨床科の専門分野（主任教授の専門領域として引き継がれることもある）に左右されることが多いからである。私の病理学の出発点は所属した教室の専門領域である肝臓病理であった。学位は指導教授のもとに肝細胞臓癌の形態病理を研究テーマ

として取得できたが、これが研究スタートとなった。

その後、久留米大学の消化器内科・外科が肝疾患を専門としていたことも関係し、自然と私の研究対象は様々な肝腫瘍性病変となり、これらの画像所見と病理所見の対比による知見を主な研究テーマとした。病理医は一般的に病理所見（肉眼像、組織像、分子や遺伝子など）から病理診断や研究を行うことが主であるが、病理医以外の臨床医を含めた学会や研究会などを通して病理診断を行う上で様々な臨床像を理解する必要性を強く認識し、肝腫瘍の血流動態や代謝・機能などを評価できる動的な画像診断に興味を持つようになったからである。本来、画像と病理は表裏一体であり、同一肝腫瘍を様々な画像所見から評価するのか病理所見から評価するかの違いである。特に外科病理では体外に摘出された組織を肉眼・顕微鏡下に観察し静的な評価を行う。一般的には病理診断が最終診断で、画像診断がどれだけ病理診断と一致するかで画像診断者の力量が評価されている。もちろん病理医は単なる病理診断だけではなくその疾患の治療や予後などの臨床背景との関連の重要性も認識している。近年の画像診断技術は著しく進歩しており、これに伴い特に肝腫瘍性病変においては病理所見と画像所見は強く連動している。したがって病理医が病理像だけを対象として理解しようとする、臨床医と共通の疑問点についての深いディスカッションが十分にできないことを経験する中で、画像診断を含む臨床像を理解することで病理診断の力量も向上することに気づかされ、そこにおもしろさを感じている。

臨床に役立つ実践的な病理研究（基礎医学）をめざすことは久留米大学病理学教室の伝統でもあるが、これを今後も大学院などで基礎医学研究を行う若手にも伝えることができれば幸いである。

～NEWS～



◆大学院医学研究科 facebook をご利用下さい

2017年3月に大学院医学研究科の公式 facebook を立ち上げています。大学院生のみならず広く地域の方へ大学院の活動をお知らせしています。企画として「修了生インタビュー」や「在学生インタビュー」を実施し、修了生や在学生の生の声をお届けしています。院生にとっても、これから大学院を目指そうと考えている方にとっても、大変有意義な内容となっています。医学研究科ホームページやニュースレターでも配信していきますので、是非ご覧ください。今後、院生のみなさまにインタビューをご依頼することもございますが、何卒ご協力の程お願いいたします。

FB : <https://www.facebook.com/kurumeugsml/>



HP : <https://www.kurume-u.ac.jp/site/gmed/shosaiart753.html>



◆第7回研究発表会の日程が決定しました

修士課程1、2年生希望者及び博士課程原則2、3年生を対象とした研究発表会が今年度も12月6日（月）・7日（火）に開催されます。エントリー受付期間は7月1日（木）～8月20日（金）です。ご自身の研究の進捗状況を把握し、客観的なフィードバックを得ることができる好機ととらえ、ふるってご参加ください。詳細が決まり次第、順次周知してまいりますので乞うご期待ください。

事務通信



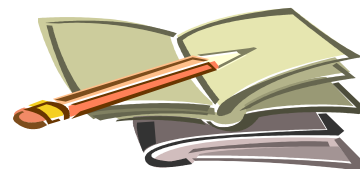
◆現住所が変更になったら・・・

現住所が変更になりましたら、必ず「学生現住所変更届」の提出が必要です。なお、メールアドレスや電話番号が変更になった場合も、教務課までご連絡ください。

重要な書類がお手元に届かない場合がありますので、ご協力よろしくお願い致します。

（※「学生現住所変更届」は大学院 HP よりダウンロード可）。

◆令和3年度 大学院セミナーシリーズ（特別講義） カリキュラムのお知らせ



担当講座	講義日時	会場	講演者	講義テーマ
眼科学	7月1日（木） 17:00～18:30	基礎3号館1階 セミナー室	北岡 隆 先生 （長崎大学 大学院医歯薬学総合 研究所 教授）	硝子体手術の臨床的意義
公衆衛生学	7月8日（木） 17:30～19:00	基礎3号館1階 セミナー室	矢野 晴美 先生 （国際医療福祉大学 医学部医学 教育統括センター 副センター 長・教授）	Society 5.0 の感染症教育

担当講座	講義日時	会場	講演者	講義テーマ
皮膚科学	9月16日(木) 18:00～19:30	基礎3号館1階 セミナー室	玉井 克人 先生 (大阪大学 大学院医学系研究科 再生誘導医学寄附講座・教授)	再生誘導医薬開発の現状と 展望
医学研究科	10月15日(金) 18:00～19:30	基礎3号館1階 セミナー室	朽木 誠一郎 先生 (朝日新聞東京本社 デジタル編 集部 デジタルディレクター)	「医療者に嫌われる報道」双方 の視点から一構造的な理解と適 切な関係のために
感染制御学	10月21日(木) 15:00～16:30	基礎3号館1階 セミナー室	麻生 憲史 先生 (社会福祉法人十善会 十善会病 院 副院長)	風疹の臨床と感染対策
外科学	10月29日(金) 17:00～18:30	基礎3号館1階 セミナー室	赤木 究 先生 (埼玉県がんセンター がんゲノ ム医療センター センター長/ 久留米大学医学部 客員教授)	ゲノム医療の現状と展望(案)
神経精神医学	11月5日(金) 17:00～18:30	基礎3号館1階 セミナー室	中村 純 先生 (不知火クリニック院長・産業医 科大学名誉教授)	うつ病予防の可能性、早期介 入
病理学	11月18日(木) 18:00～19:30	基礎3号館1階 セミナー室	坂田 麻実子 先生 (筑波大学 医学医療系血液内科 ・准教授)	血液がんにおけるトランス レーショナルリサーチ
病理学	11月19日(金) 17:30～19:00	基礎3号館1階 セミナー室	味岡 洋一 先生 (新潟大学医学部 臨床病理学分 野・教授)	未定
内科学(呼吸器・神 経・膠原病内科部門)	11月25日(木) 17:00～18:30	基礎3号館1階 セミナー室	審良 静男 先生 (大阪大学 免疫学フロンティア 研究センター 特任教授/大阪 大学 名誉教授)	自然免疫
分子生命科学研究所 (遺伝情報部門)	12月9日(木) 18:00～19:30	基礎3号館1階 セミナー室	沢村 達也 先生 (信州大学 医学部分子病態学教 室 教授)	血管機能異常の探求から生 体防御機構を考える

※今後の予定を掲載しています。

開講日時・講義会場等の変更がある場合には変更後の情報、ならびに未定の日程については決定後、大学院医学研究科ホームページで情報提供いたします。

また、当該科目履修者は5回以上のセミナー出席およびレポートの提出をお願いいたします。
レポートについては、各セミナー終了後1週間以内に、医学部事務部教務課までご提出ください。
履修者以外の方も自由聴講が可能ですので、是非ご参加ください。

編集後記

早いもので新年度が始まり3ヶ月がたちました。学生生活はいかがお過ごしでしょうか。本年度の大学院医学研究科には新入生修士課程25名、博士課程20名が入学され、新たな一步を踏み出されました。大学院事務担当も教務課：猿渡・林田、庶務課学位申請担当：服部・ペナーでみなさまのサポートに努めさせていただきます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。(林)

